神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Taking turns at talk on screen : an analysis of the correlation between words and images in cinematic discourse

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kizu, Kumiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1475

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

［博士論文審査の要旨］

映画のディスコースを分析・記述するには，せりふと映像の両方に言及せねばならない。しかし，両者の関係をとらえるのは思いのほか難しく，談話分析研究においてこの方面の説得力のある先行研究はこれまで皆無と言ってよい。

本研究は，対話シーンの基本的な映画の撮影法ショット・リバースショットがどのように観客に提示されるかに着目する。話者のクロースショットとそのせりふが同調するものをノームとして設定したうえで，せりふの話者とその映像が同調しないパタンを抽出し，それぞれのパタンが観客のせりふの理解にどのような影響を与えるのかを綿密に考察している。せりふと映像の関係を扱う初めての実質的な貢献であり，その点において本研究は高く評価できる。

もっとも，本研究がディスコース研究に対して持つ意義については，じゅうぶんに論じられたとは言いがたい。その点が残念であるが，映画という特定のメディアにおけるディスコース特徴の記述・説明に本研究が果たす役割は大きい。

以上の理由から，本審査委員会は本論文に以下の評価を与え，課程博士論文として認定を可とすることで意見が一致した。

［論文審査結果］

本論文は，映画におけるショットの移り変わりが，登場人物が発するせりふとどのように結びついているかその関係を数種類のパタンに分けて記述し，ショット交替のパタンが観客にどのような印象を与えるのか説明する。構成は以下の通り。

1. Introduction
2. Previous studies
3. Data and methodology
4. Observation
5. Analysis 1: The primary function of the combinations of words and images
6. Analysis 2: The durational function of the combinations of words and images
7. Discussion
8. Conclusion

まず１章は，全体の目標を設定する。映画は，マルチモーダルなディスコースであり，ことばと映像，さらには音楽や効果音などが組み合わさっている。映画のディスコースにおける表現の仕組みを理解するには,複数の伝達様式がどのように結びついているのかを解明する必要がある。ことに，映画の主要な構成要素であることば（せりふ）と映像（ショット）の関係を記述することは重要である。

しかし，第２章で明かされるように，これまでの映画の研究はこの点に関して有意義な貢献を行うことはできなかった。ショットの撮り方に言及するものがあったとしても，それは原則や規則性を記述したものではなく，特定の映画における個別的な効果に対する説明に終始していた。

そこで，本研究は 12 本のハリウッド映画のなかから，2 名の登場人物が対話のやり取りを交わす場面で，ショット・リバースショットという撮影法が行われるシーンを取り出し，映像の撮り方（ショット交替）とせりふ（話者交替）の関係を調べることにした。3 章はそのような分析・

記述を行うにあたって，用いるデータの種類や方法論について述べている。

2名の登場人物がやり取りを交わす場面を取り上げるのは，対話が一番単純で，基本的な伝達の場であるからである。また，ショット・リバースショットも，映画にとって基本的な撮影法である。これは，対話者それぞれを別のカメラでクロースショットに収め，せりふを話す登場人物の表情が観客に分るように，そのショットを交互に提示する方法である。

4章において，このショット・リバースショットの基本的な提示方法とバリエーションが示される。ショット・リバースショットの基本は，ひとりの登場人物が話しているあいだは，その話者のクロースショットが続き，話者がもう一方の登場人物に交替すると，それに合わせて新たな話者のショット（話し手ショット）が提示される。つまり，せりふと映像がきちんと同調するのがショット・リバースショットの基本形である。これを著者は the synchronized type と名づける。

ショット交替とせりふ交替のタイミングがずれることもある。たとえば，ショット交替が起きる前に話者交替が起きることもある。結果として，先行話者（＝聞き手）の映像（聞き手ショット）に新たな話者のせりふがかぶせられる。これを the voice-first type と規定する。逆に，話者交替よりもショット交替が先行し，次の話者（＝聞き手）の映像（聞き手ショット）が（ごく短いあいだではあるが）映し出されることがある。これを著者は the face-first type と命名する。

加えて，話者交替が起こらない場合もある。話者のせりふが交替なく続けられるあいだに，聞き手のショットが挿入される。これは，the mute type と呼ばれる。

このように，ショット交替と話者交替の組み合わせには，synchronized，voice-first，face-first，そして mute の４つのパタンが考えられる。本論文の目的をここでもう少し具体的に言うと，映画においてショット交替と話者交替のずれがどのようなときに起こり，そしてそれが観客に対しどのような解釈をもたらすかを示すことにある。

この目的をさらに綿密に遂行するために，本論文は the voice-first type と the face-first type を，ずれの相対的長さとせりふの当該部分が果たす機能に応じて，それぞれ３つずつに分類する。

the voice-first type は,次のように分けられる。

Voice-first 1: 短い語が１語程度ショット交替に先行する
ショット交替とのずれは短い
話者が急いで話をはじめた印象

Vice-first 2: 会話の順番を開始するために用いられる語句がショット交替に先行する
ショット交替とのずれは比較的短い
話者が聞き手に先駆けて会話の順番をとった印象

Voice-first 3: 以降の自分の発話内容を予想させる節や語句がショット交替に先行する
ショット交替とのずれは比較的長い
話者が以降の発言権を確保しようとした印象

そして，the face-first type も次のように分類できる。

Face-first 1:　短いボーズが発話交替の前に置かれる
発話交替とのずれは短い
会話の順番を取るのが少しだけ遅れた印象

Face-first 2:　先行話者が発話の交替を促す語句を続ける
発話交替とのずれは比較的短い
（次の）話者が順番を取る用意が整っていない印象

Face-first 3:　先行話者が自分の発話内容を繰り返すような語句・節を続ける
発話交替とのずれは比較的長い
次の話者がためらいなどから発話の開始を遅らせている印象

このような分類から見えてくることは，映画制作の過程の段階でエディターが感覚的に行っている作業の規則性である。ショット・リバースショットのシークエンスにおいて，映像とせりふを組み合わせてショット割りを行う際にエディターが何を手がかりにしてその作業を行っているのかが見えてくる。つまり，映画のディスコースにおいてショット交替は，登場人物のせりふの種類とそのせりふがどのように発話されたかによって，かなり規則的に行われるのである。さらに，このような規則に従ってショット割りを行うことで，観客に対し当該のせりふをどのように解釈すべきなのかヒントを与えているのである。

本論文のこのような発見は，映画のディスコース研究においてはじめて見出されたもので，その学術的価値は高い。また，先述のように，映画のディスコースを十全に分析・記述するためには，映像とことばの関係に関する考察を外すことはできない。その意味において本論文の試みはとても重要である。

加えて，話し手ショットにおいてはストーリーの展開上重要な情報が提示される傾向が強いのに対して，聞き手ショットでは登場人物間の相互交渉において重要な情報が示される傾向が強いことを本論文は指摘する。この指摘も，映画のディスコースを理解するうえで意義深い。

このように，本論文は映画のディスコースを分析・記述するうえで極めて独創性の高い研究であり，映画のディスコースの特性（映像とせりふとの関係性）をほかの研究に先駆けて示すことに成功している。

改善すべき点としては，映画におけるショット・リバースショットの重要性を強調し，この研究が映画のディスコース研究のどの部分に対してアプローチを行っているのか明確にすること，および,本研究が映画のディスコース研究に対してどのような意義を持つのかを明確にすること，などが挙げられる。

以上，本論文の概要を示しつつ，評価を述べた。改善すべき点もあるものの，本研究がディスコース研究に対して果たす意義は高いと考えられる。上述の点を考慮し，本委員会は課程博士の学位を著者に与えることを可と判断した。

最終試験結果　［２０１３年2月１２日試験実施］

最終試験は３名の学内審査委員（山口治彦（主査），本多啓，三間英樹）と１名の学外審査委員（林礼子甲南女子大学教授）の４名により公開審査の形式で本学の三木記念会館で行われた。

はじめに，著者が映画資料の提示を交えつつ，オーラルプレゼンテーションを行なった。引き続き，審査委員と著者とのあいだで質疑応答が行なわれた。また，フロアからも質問がなされた。

論文の意義は高く評価されるものと考えるが，質疑応答における著者の回答は十分とは言えない点があった。自分の意見をもっと自信を持って開陳すべきであったと考える。（発熱による著者の体調不良があったことを考慮しても）その点が残念である。